

1 最後の晩餐 (13:1-17:26)

最後の説教への導入 (13:31-28)

弟子たちへの最後の説教 (14:1-17:26)

最後の説教 第1部 14:1-31

三部からなる説教では、イエスがこの世を去る時（イエスの時）が差し迫っていることが最も多く語られる。イエスは、ご自分が御父を証しする受肉した真理であって、人類に上から命を与える方であるがゆえに、自分が御父に至る道であることを明らかにしている。

これから、同じテーマが、聖霊（15-17節）、イエス（18-22節）、そして御父（23-24節）へと連続的にあてはめられる説教箇所へと入っていく。すなわち、そのテーマは、もし私たちが掟を守るならば、神である三位のそれぞれの方が私たちのもとに来られて、共に住むであろうということである。

聖霊 (14:15-17) (用語解説：聖霊を参照)

聖霊が与えられるための条件は、掟を守り続けること。パラクレートス（聖霊）はもともと法律用語の弁護者で、聖霊は、弟子たちの強力な弁護者になるであろう。（別の弁護者：一ヨハネ 2:1 参照）「真理の霊」という表現は、ヨハネ的と言えよう。それは、世に対して、イエスについての真理を啓示する霊であることを意味する。勿論、イエスを受け入れる者だけが、この霊を受け取ることができる。

イエス 14:18-22

イエスは再び弟子たちを慰め、彼が戻ってくることを予告なさる。ただし、今のところ、第二の来臨の時ではなく、イエスと御父とが一つであることをキリスト者に理解させ得る神の内在という霊的な方法においてなのである。

御父 14:23-24

ユダの質問に対するイエスの答えは、御父がやって来て、キリスト者すなわちイエスのみ言葉を守るキリスト者の中に住むことを意味している。なぜなら、イエスのみ言葉は、御父のみ言葉であるから。三位一体の神の存在は、愛のこもった知識、つまり愛にしっかり満たされた知識を通してのみ認識可能な

ので、神を愛しながら、同時に神との約束を破ることはできない。

結び 14:25-31

説教の結びは、聖霊の到来についての第二の予告を導いている。ここで強調されるのは、教師としての彼の役割で、誤りを犯すことからキリスト者を守り、そして彼らをイエスの心に常に近づけておくこと、こうした役割において、聖霊に信頼している。

ここで、イエスは弟子たちにご自分の平和 (shalom)、つまり別れの挨拶を与えている。この平和は、罪から解放され、神に結ばれる平和であり、あらゆる欠乏を完全に満たしてくれる平和にほかならない。

第一部の繰り返し 16:4-33

16章で、その聖霊をつかわすのは、イエスであると確認している。聖霊は、御子の代理である。彼の活動は、裁判の中で次の三人に関係に及ぼしている。a 世=それを信じることを拒絶し、「罪をおかし」た。b イエス=死の宣告をうけたが、死後、彼の「正しさ」が示されることになる。c サタン=^{いっけん}一見して勝利を収めたように見えても、実のところ、永遠の昔から神によってあらかじめ断罪されていて、滅亡をもたらす存在にすぎないことが明らかにされていく。

聖霊 16:13-15

二度にわたって聖霊について語られているが、二回とも教えるという側面が強調されている。イエスは御父からすべてを受け取っていたが、聖霊はすべてをイエスから受け取っている。

イエス 16:16-22

ここでも、弟子たちがいくつかの点で誤解していたことと並行している。イエスの答えは、一時的な(14:18参照)彼らの悲しみと、世(14:19参照)から受ける拒絶に触れている。ここでのテーマは、イエスの死と復活は、ある意味でメシアの誕生にほかならないこと。

御父 16:23-27

ここで、イエスの名において願うというテーマの戻るのである。イエスは、御父を明確に啓示すると約束し、御子を受け入れる人々を御父が愛するという親密さを強調している。

結び 16:28-33